

## 「日本の美」総合プロジェクト懇談会（第2回） 議 事 要 旨

- 日 時：平成27年12月18日（金）11：00～12：19
- 場 所：官邸2階小ホール
- 出席者：津川座長、内永委員、串田委員、小林委員、千委員、林委員、  
森口委員
- 政 府：安倍内閣総理大臣、馳文部科学大臣、世耕内閣官房副長官、  
河井総理大臣補佐官、青柳文化庁長官、有松文化庁次長、  
新美外務省国際文化交流審議官、安藤国際交流基金理事長、他

（司会：松永内閣審議官）

冒頭、事務局より、世耕内閣官房副長官が参議院議員運営委員会理事会に出席するため、遅れての参加になることから、進行は事務局が行う旨、説明があった。

### 1. 開会・総理大臣挨拶

次に、安倍内閣総理大臣より、以下のとおり挨拶があった。

伝統ある日本の文化芸術を世界の人たちに知ってもらいたい。文化外交を首脳外交にしっかりと位置づけ、強力に発信したい。日本の外交の強みとしていきたい。そのような思いでこの懇談会を設けたところ。

前回の会議では、委員の皆様から、「日本博」の開催や日本映画による世界市場開拓、文化発信の担い手の育成など、多くの提案をいただいた。特に津川座長から御提案のあった「日本博」は、我が国の文化芸術の魅力を発信し、日本への理解や親近感を深めていく上で大きな力となるものである。

1991年にロンドンで開催されたジャパンフェスティバルは、成功例として参考となる。本日は、前回の御提言について、具体化に向けさらに議論を深めていただくとともに、新たなアイデアも御提案いただければと思う。

「日本の美」をしっかりと世界にアピールしていくため、委員の皆様には引き続き積極的な御意見を賜りたい。

（報道関係者退室）

## 2. 議事 (前回懇談会の議論を踏まえた意見交換)

### (1) 政府側からの説明等

まず、有松文化庁次長より、資料1-3に基づき、懇談会における主要論点に関するイメージについて説明があった。

次に、安藤国際交流基金理事長より、資料2を参考にしつつ、ジャパンフェスティバル1991について説明があった。説明の要点は以下のとおり。

- このフェスティバルは、日本が現在までに実施した日本紹介行事としては最大のものだと思うが、現在、これだけのものを再び実施することは容易ではない。いわば、バブル時代の末期に花開いた夢物語として聞いていただくとよい。
- フェスティバルは、1991年9月から4カ月間にわたり、イギリスで開催され、350以上の企画・行事が行われた。当時の日本の芸術、文化を全てそのまま持っていった感じで、実現しなかった企画は宝塚くらいのものであった。
- 企画リストは資料2のとおり。大きなものだけを紹介すると、
  - ・ヴィジョンズ・オブ・ジャパン展という美術展があった。これは、ヴィクトリア・アンド・アルバートミュージアムで行われたもので、磯崎新さんが総合プロデューサーとして日本の当時の生活のあらゆる側面を見せるということで行った。この美術展だけで約10億円がかかった。そのほか、鎌倉彫刻展やロボット展、民芸展等、いろいろなものがあった。
  - ・舞台公演では、歌舞伎公演もあった。ナショナル・シアターで、当時の中村勘九郎や坂東玉三郎も出て、大変な好評だった。あとは文楽、能、狂言、あるいは、現代劇も、蜷川幸雄さんの演出作品であるとか、劇団四季のミュージカル、そのほか、アングラ劇もたくさんあった。あるいは、ダンスも山海塾を初めとして、パパ・タラフマラとか、いろいろなものが行われた。
  - ・音楽は、小澤征爾さんのサイトウ・キネン・オーケストラのコンサートがあったし、東京交響楽団も来た。現代物では、渡辺貞夫さんのジャズであるとか、坂本龍一さんのコンサート等があった。
  - ・映画では、日本映画の歴史の中で最もすばらしい監督50人を選び、1作品ずつを見せた。これは、当時、高野悦子さんが各映画会社に1作品ずつ交渉して版權をいただいたもの。
  - ・大きな行事としては、ロンドンのハイド・パークで「祭」というものを行った。流鏝馬、ねぶたが出て、花火や日本の和食を出す屋台がずらりと並

び、ロンドンの30万人の方々が詰めかけたと言われている。

- ・一番人気があったのは大相撲公演だった。ダフ屋の切符が40倍にはね上がった。テレビでも中継され、その年のイギリスのテレビの最高視聴率をとった。人数にして240万人の人がテレビを見たと言われている。
- ・オープニングには、日本の皇太子、チャールズ皇太子が来てくださった。また、当時のイギリスのメジャー首相夫妻であるとか、サッチャー元首相も行事を見に来てくださった。エリザベス女王も、この行事について、当時の北村駐英大使に、これはすばらしかったということ言われた。

- これだけのものをやるには、準備期間を含め3年以上がかかった。予算は、全体として、イギリス側も含めて約50億円だった。
- このフェスティバルの特色としては、まず、ロンドンだけでなく、イギリス全土で行われたことがある。また、教育プログラムを組み合わせ、イギリスの全学校の10分の1に当たる4,000の学校にいろいろな方々が訪れて、子供たちに日本紹介のプログラムを行ったことがある。
- もう一つ、非常に大切なことは、日英の共同作業であったことがある。そもそも、このフェスティバルは、ロンドンのジャパンソサエティーが100周年を迎えるということで始まったものであることから、むしろ、イギリス側が主導していた。それが大成功につながった一つの要因である。例えば、企画についても、イギリス側から「こういうものを見たい」と言ってきて、日本側がその実現に向けて調整を図った。イギリス側のニーズを尊重したということ。それから、イギリス側は、当時のイギリス社会全部に根を張った方々がおり、広報やプレス対策の上で非常に効果的であった。
- イギリス側の委員会の委員長には、ピーター・パーカーさんという元国鉄の総裁が就いた。日本側も委員会をつくり、当時の経団連の副会長かつ東芝の相談役であった佐波さんが委員長、駐英大使をおやりになった山崎大使が副委員長に就いた。日本側の委員会がイギリス側の委員会を後押しした形。
- 全体で1,000社を超える日英の企業が協力しており、予算は、全体で約50億円。日本側の方が多く負担していた。内訳としては、まず、日本委員会が10億円を集めた。これは、佐波委員長や山崎副委員長が一社一社回って頭を下げてお願いしたもの。また、日本政府は、外務省、経産省、文化庁が合わせて5億円を出した。公的機関としては、国際交流基金、JETRO、東京都等が合わせて6億円を出し、民間スポンサーが13億円出した。また、英国委員会が4億円の寄付を集め、これらで38億円。このほか、切符収入やグッズの売り上げなどを合わせて、全部で約50億円になった。
- イギリスの報道もすごく、主要紙のみで800ページ以上の記事が報じられた。テレビも、BBCテレビが25時間の日本特集を組み、BBCラジオが73時間のジャ

パンシーズンという特集をした。ただ、日本での報道ぶりがほとんどなかったことに、非常に悲しい思いをした。

- フェスティバルの効果としては、日本への理解が格段に深まったということがある。かつ、一部の知日派だけでなく、一般の方々までも日本について語ってくれるようになった。イギリスの調査によると、日英関係が前進したと答えた方々が英国国民全体の84%に上った。また、別の調査では、日本が最も尊敬する国であると位置づけられるなど、イギリスという国を親日国とするのに大いに貢献したと言えると思う。

次に、青柳文化庁長官より、資料3に基づき、日本仏教美術展について説明があった。

## (2) 意見交換

次に、意見交換が行われた。各委員等の主な発言は以下のとおり。

### 【津川座長】

- ローマでの日本仏教美術展は、私も委員をさせていただいている。イタリア側がカタログをつくりたいと申し出たが、文化庁がなかなかそれを受け入れていただけなかったという話を聞いたが、この問題は解決したのか。

### 【有松文化庁次長】

- 展覧会全体のカタログについては、例えば、出展する仏像の解説などは文化庁の専門家が作成するが、これ以外に、当初から関わっていただいているイタリア側の専門家の方々からの文書を掲載してほしいとう申し入れがあり、掲載していただく方向で話を進めている。

### 【津川座長】

- 今回は、「Mission」、「Vision」、「Approach」、つまり、使命、目標、手法の3項目に分けて御提案を申し上げたい。
- まず「Mission」、使命としては、「国際社会での日本の存在感の向上」とする。文化には、経済力、軍事力以上の力がある。だから、文化の力で日本の存在感を高める方法を考える必要がある。存在感を高めれば、日本の発言や行動が世界の人々の記憶に残るようになり、発言するほど日本の存在感は高まるようになるはず。
- 残念ながら、これまで日本の文化外交の成果が顕著にあったとは思えない。これまでの文化外交にもし成果があったとすれば、それは外国人が気づいて

くれたからにすぎない。気づいてくれた分しかうまくいっていない。日本文化のよさ、おもしろさを知っているという外国人のプライドのありかを会得する必要があると、痛切に感じたところ。

- そのため、日本固有の価値を明らかにするべきだと思う。日本固有の価値観は、異物の混在を許容する価値観である。だから、「Vision」、目標としては、まず「分かるはずのない国日本」と分からせることとする。分かりにくいことが、本来、文化の基本的スタンスであり、これは、必ず、好奇心と異国情緒をあおるはず。
- なぜ日本のアニメは世界で受け入れられるのか。日本には、ロボットが人類を滅ぼすという発想がなく、ロボットは、モンスターではなく友達である。外国人から見れば、そこに得体の知れない気持ちの悪さも同居している。世界の人々は、本来同居するはずのないものを同居させてストレスがない日本人に不思議さを感じている。異物の混在を許容し、純粹で混沌とした多様性に富む日本の文化が世界で受け始めている。
- 例えば、ディズニー映画「ベイマックス」では、日本の神社で鈴を見たアメリカのスタッフが、ベイマックスの顔をその鈴に模したという。かつ、ベイマックスはマシュマロのように柔らかく、どんな形にも順応する。そして、戦わない。常に話し合っって平和に解決するロボットを作り上げた。日本の文化がディズニーにまで浸透していることに気がつくべき。
- アメリカでは、カラオケを初め、盆栽、生け花、和歌、漫画、かわいい、弁当など、日本語のまま通用している。これを見ても、日本の文化が混在している文化だということがわかり始め、かつ、魅力を持ちつつある証拠だと思う。
- それは、我々が自然を愛する心を持った多神教であること、そして、1万年以上前から今日に至るまで自然崇拝というアニミズムを続けてきた世界で唯一の国であることに起因している。今こそ、日本という国の持つ不思議とともに、奥深き日本の美を世界に提示するべき。それも、無邪気かつ狡猾な方法で提示する必要がある。異物の混在を許容する日本固有の価値観は、多様性に富む文化であるが故に、世界の平和に貢献できるはず。
- 「Approach」、つまり、使命、目標を達成するために、文化の力で「世界を日本化する」ことを「手法」とする。日本という一冊の本は、分厚くて奥深い。
- 手法1としては「日本博」。日本固有の価値観を体験する「日本博」では、アイテムを絞り、一度で全てを見せないという手もあると思う。つまり「点」ではなく「線」にして、毎年継続的に世界各地で行い、最終的に面にしていく方法は如何か。

- 「線」にする方法としては、組み合わせがいろいろと考えられる。例えば、アニメと浮世絵と縄文土器を同時に展示することを通して、日本固有の価値観を感じてもらおう。つまり、縄文をキーワードとして、「アニミズム」、「自然を愛する心」、「命の平等」、「擬人画」、「北斎漫画」、「富嶽三十六景」、「アニメーション」、こういったものが一貫して縄文からのアニミズムによって成立していることを、組み合わせとして見せるということ。
- 例えば、来年、ローマで行われる日本仏教美術展を日本博2016とし、これを第1期とする。そして、2017年にはパリないしロシアで、2018年にはロンドンか北京、2019年にはニューヨークかロサンゼルス、そして、2020年のオリンピック開催のときには、大阪でこれを面として開催することも一つのアイデアかと思う。
- そして、日本博実行委員会とその分科会を設けて編さんする。紹介者は、開催国の外国人になってもらうことが望ましい。「日本博」の出品物を国内でも振興することで好循環もつくり出したい。また、官邸で毎年各国の大使と文化人を招いた「日本の美の会」を行いたい。
- 手法2としては、日本映画での世界市場開拓。映画や映像は、日本の奥深さを伝達する最も効率のよいメディアであり、戦略的に活用してはいかがか。まず、「天孫降臨」をアニメ化する。日本の神話を小中学生に、世界の子供たちに、まるで我々がかつて見た孫悟空のように、「天孫降臨」を面白く見せたいと思う。また、時代劇を「文化による世界の日本化」のための戦略として制作したい。時代劇は異物の混在を許容する日本の価値観を物語にしやすいためである。
- そして、ハリウッド映画のノウハウと世界に配給網を持つノウハウ、つまり、世界の映画館が収入の分け前をどうやって渡すのかチェックし研究する。更に、「ドラマチカ」研究部会を設置する。ドラマの内容に関するノウハウを研究していかないと、世界の市場開拓にはつながっていかない。例えば、アメリカでは、異なる人種が混在し、英語だけでは通用しない中、全ての人に映画を見てもらおうとする為に、結局、言葉ではなくて、キャラクターや絵で見せるという方法を用いている。ハリウッド映画が世界市場を開拓した根元はそこにあると思っている。
- 官邸内に日本フィルムコミッションを組織し、世界中からの日本での映像制作を支援する。この間も、トム・クルーズの映画で、都庁の上からガラスを破って飛び降りたいという話があったが、日本では許可がおりず、結局、ドバイで撮ったことがあった。世界における日本の存在感の向上の一つとして、世界の映画撮影が日本で行われるよう、ぜひ積極的になっていただきたい。
- 手法3としては、「東京オリンピックにシンボルを」である。世界中から注

目が集まる東京オリンピックこそ、日本の奥深さを表現する最高の機会。ここで、まず、オリンピックの聖火台を世界最古の縄文式土器の火炎土器とする。そうすることで、日本が1万6,000年以上の歴史的文化を持つ国であることを世界に伝えたい。次に、入賞者に配られる花を、皇室の紋章に合わせて菊としたい。日本の皇室が、世界一の伝統を持つことを感じさせたい。

### 【千委員】

- 日本の伝統的な美について、日本人そのものの理解がなくなっていると感じる。その理解を喚起するとともに、本来の「日本の美」とは何かを海外には発信し、日本の理解へとつなげたい。「日本の美」は、長い年月をかけて芸や技を精進努力することで、高い精神的境地に達する。その達した人を「達人とか名人」と呼ぶ。そして、その内面が形として表れてくるものが「美」である。道の世界は単なる勝負とか一目のみの美ではない。
- その中でも、茶道は体系的な哲学背景を有している。その精神は和で代表される。和は、平和の精神である。利休は、茶室に刀を持ち込ませず、公家や町民も同室して平和で民主的な場を作り上げていった。日本の中世から平等とか民主の精神があったと言える。茶道には、献茶という伝統的な祈りの世界があり、道の世界でも特別なものである。
- 「日本の美の世界」のようなものを世界各地で開催し、その中で茶道の紹介も実現してほしい。また、茶道や能、狂言のエキスを鑑賞してもらう総合事業を展開することで、日本の伝統的な心・技・体の一体化した美を世界の人々に理解してもらうことができるだろう。
- 私はユネスコの親善大使をやっており、この間、親善大使会議があった。平和祈念で、私がユネスコ本部でお献茶をし、お茶会をした。皆さんに大変お喜びいただいた。しかし、その晩、残念ながらパリでテロが起こった。そのときのフランス当局の手配が大変早かった。あらゆる集会所の場所に警察、軍隊が出回って、警備をした。
- 集会をすところが一番テロで狙われるらしい。この文化の催しとか、いろいろな芸能、芸術の催しでは、人々がたくさん集まるので、イスラム国、あるいはあらゆる残虐をする組織に狙われる可能性が高いと思っている。日本でも油断はできない。文化交流というのは、大衆、民衆が接触することによって大きな成果を上げるわけだが、そのために狙われやすい。もしテロに狙われるようなことがあれば、文化交流もなくなり、国の信用度もなくなってくる。このため、セキュリティーということはこの文化交流の中の大きな眼目として取り入れていただいて考えていかないと、万が一のことがあったときに大変なことになる。

### 【林委員】

- 津川座長の提案は、具体的なアイデアに満ちていて、とてもおもしろく拝見した。オリンピックの聖火台を縄文土器にするなど、「なるほど」と思う。ただ、「天孫降臨」のアニメ化には少し違和感を持った。「日本の美」を世界に発信する、日本を誇りに思う、愛国心を持つことは素晴らしいことだが、そこに、いろいろと落とし穴があるのではないかと思う。
- キーワード的なことで「天孫降臨」という文字が出てくると、私のような年齢の者でも「あれ」と思ったりするので、「日本博」は素晴らしいアイデアだと思うし、ぜひ実現させていただきたいと思うが、こういうものには少し議論が必要かなと思う。

### 【津川座長】

- そうですね。少し題名を考えたほうがいいですね。

### 【小林委員】

- 座長提案の「日本博」の開催に大変共感する。直近のミラノにおける和食を中心とした博覧会が大変な人気を博したと伺っているし、1991年の英国全土における文化的な催しに加え、1910年にも「日英博覧会」、これは日英同盟を強化するという意図もあったようだが、835万人の観客を集めたという大変大規模な催しを展開している。
- 先ほど座長が言われたように、幾つかのテーマを組み合わせて提供するのには私も大賛成。その中で、日本が多様な文化を国風化していった歴史がある。不思議な独自性、多様性を組み合わせていかれるとよいかと思う。
- 例えば、日本仏教美術展も、石や鉄、金属の彫刻ではなくて、木という自然の素材を使った日本彫刻の特徴があろうかと思う。そのようなことも前倒しに訴えていけば大変印象深いのではないか。イタリアにおける大理石、石の文化に対して、木の文化という独自の提案ができるのではないか。

### 【森口委員】

- 「天孫降臨」に関しては、私も再考を要すると思う。
- 「認識は悲観的に、行動は楽観的に」。今年、特に印象に残った言葉である。前回提案した「伝統工芸アーカイブ」について、現状の余りにも悲観的な認識に唯たじろいばかりでいられず、今回は楽観的な行動として、「The Museum of Intelligence」を提案したい。すべての日本人に自信と誇りを覚えていただくと同時に、海外の人々に明確にアピールする拠点としての施設である。これに最もふさわしい建造物は、法務省本館をもって他にありえない。



- 手わざが生み出す叡智とも、情報とも言うべき「伝統工芸技術」を、今日、日本が誇る最先端の産業科学技術の誕生を可能にさせた土壌として位置づけ、その全体像を「Intelligence of hand」として表現する。F1のレーシングカーに使われたエンジンから日本刀、宇宙ステーションの太陽光発電パネルから折り紙、LZR Racer（レーザー・レーサー）から友禅の着物、といった視点だろう。
- 文明の近代化の過程で、このIntelligenceはおおいなる成果を生み出したが、個人の天才的なindividual Intelligenceに頼るところが大きく、今やこの文明が瞑想する部分を持ちつつある中、解決の糸口としてcollective Intelligenceに注目したい。これは世代を超えて、代々継承されてきたもの。あるいは、極めて今日的なものとも言える、同世代の人の横のつながりによる協働のIntelligenceを指す。日本人が一番得意とするのが領域である。以上のことから、「日本の美」総合プロジェクト推進の核として、「The Museum of Intelligence」を提案したい。

#### 【串田委員】

- 1991年のジャパンフェスティバルについて、日本でのその後の報道がなく、後からいろいろ知ることになったことが一番の問題だと思う。外へ向けることと同時に、「我々は何だろうか」ということを、国民が知らないという意味がない。
- 外に向けると同時に内側に向けることは、非常に大切なことだと思う。同時に、文化というものが昔で終わっているわけではなく、今につながっていること、今、我々が感じていることが文化であって、専門的な方だけではなく、全ての国民がどんなふうにそれを感じているかということが、日本の総体的な文化であり、それを世界に知らせなければいけない。そういう意味では、我々がもっと若い人たちや多くの人たちに発信していかなければいけない。
- このため、「日本博」は必ず日本でも実施し、「どうだ、私たちはこれでいいか」ということを確認する。そのときに、みんなから「もっとこういうことをやってほしい」とか、「我々はこうではない、こうだ」とかいう意見も出てくると思う。
- もし「日本博」が実現し、毎年そういうことができたら、そのことで我々も成長するし、世界にも年を追うごとに線として浸透するのなら、そこに成長する可能性は非常にあると思う。
- 私は新しい形の歌舞伎を、東急Bunkamuraで公演した後に、長野県の松本でやるのだが、そのときにいろいろと変える。そうすると、東京で見たお客さん

が必ずまた松本まで見に来る。そのようなお客さんは、舞台の効果だけではなくて、松本の人の楽しみ方、こんなに純粹に素直に地方の人が、一生懸命それを盛り上げて、一緒にいろいろなことに協力して、自分たちの歌舞伎にしようとしている、その姿が見たい。だから、舞台の中だけではなくて、楽しんでいる姿そのものが文化なのだろうということを感じた。

- 一方的に「日本はこうだ」と言うだけではなく、世界の人とそれを共有する。コクーンでやっている舞台のときにルーマニアの若い女性を振付師として招いて1カ月滞在してもらって、日本のことも随分知ってもらった。物すごく自分の国のこと、それから、ヨーロッパのことを知っている。日本のことも知っているのので、彼女たちと話をしている、私が日本のことを話すと、日本の俳優のほうが「どういうことか」と聞いてきて、一生懸命説明しなければならぬような恥ずかしいことがあったりした。我々がもっと若い人たちと一緒に文化を堂々と伝えていく必要があると感じた。
- 日本文化は、みんなが楽しみ、意識し、大切にし、生きていることとつながっているということ、国民すべてが堂々と言えるようにする環境がとても大切だと思う。

#### 【内永委員】

- 津川座長の提案はぜひ成功させたいと思うが、「天孫降臨」などの言葉はいろいろと意見が出てくると気になった。
- 日本はよくわからない国で、外国からミラクルに思われていると日本国内の方はよく言うが、どの国の人も自分の国はそうだと思っている。だから、しいて言えば、先ほど串田委員がおっしゃったように、国内的に、もっと日本の美しさであり、歴史であり、文化を我々自身も認識する必要があるのではないか。日本人は、外国の方から尋ねられてももごもごとしてしまうところが多い。また、外国で、日本の国の文化や歴史、哲学などに対して、ほとんど何も言わない。
- 「日本博」というイベントをすることは大事だと思うが、それだけだと一過性になるので、国内との連携、そして、恒常的に、日本の文化について、海外に対して国民自身が自分の言葉で話せる、発信できることも考えていく必要があるのではないか。
- テクノロジーの国の日本なので、伝統工芸や歴史的な背景等に加え、これらに、日本の技術力がいかに貢献しているのかといったことも組み合わせて発信することも必要ではないか。
- 縄文時代は1万年続いた世界的にもまれな時代。あれだけ長く安定した状態で、そこから出てきている文化財がすばらしい。だから、オリンピックの聖

火台もよいが、加えて、縄文時代のことももっと発信してもいいのではないか。

- 文化発信はやるべきであるが、今は、ITでコンテンツが世界中に広まっているので、映画もさることながら、むしろコンテンツという形態に広げていったほうが、発展がある。あまりフィルムにこだわる必要はないのではないか。
- ぜひこれを成功させて、日本のプレゼンスを文化の形でも明確にしていくことは、国を強くする意味でもとても大事だと思う。

各委員による意見交換終了後、世内閣官房耕副長官、馳文部科学大臣及び安倍内閣総理大臣から、以下のとおりコメントがあった。

#### 【世耕副長官】

- 今日の懇談会のコンセンサスだと思うが、日本文化を海外に紹介するときに、日本人の考えだけでやってはいけない。やはり現地の人々のいろいろなアイデアとかを取り入れてやらなければいけない。これから始まる仏教美術展についても、文化庁はイタリア側の意見をよく聞いて、カタログも含めてやるようをお願いをしたい。

#### 【馳文部科学大臣】

- 今、文科省も文化GDPという考え方で、日本文化をどんどん海外に発信していき、GDP600兆に向けて一翼を担うことも考えている。今日の具体案を取り入れていきたいと思うし、同時に、世界に発信する以上は、日本博の取組みもよいと思うが、当然、外務省、観光庁、経済産業省等と連携をしながら取り組んでいくべきだと思うので、推進役となれるように頑張りたい。

#### 【安倍総理大臣】

- 大変有意義な議論をいただいた。この懇談会は、自由闊達に御議論をいただく場。このため、津川座長からお考えをそのまま出していただき、議論をしていただいた。
- 私自身も映画が好きなので、ぜひ映画を、日本を発信していくツールにしていきたいと思っている。ただ、何を制作するかというのは、あくまでも民間が行うこと。政府がコンテンツまで決めて、お金を出すことはない。
- 民間が何かをやる。その上で、何か規制等の問題があるならそれを取り去っていく。あるいは、政策において若干の支援金も含めて支援をしていくことはあるだろう。また、映画を文化財として保存していく、ノウハウを次の世代にも継承していくことについては、国としても支援をしていくことができ

るのではないかと思う。

- 日本とトルコとの共同制作である映画「海難1890」は、日本とトルコの友情の紐帯にもなり、その強化にもつながることから、政府としても支援している。ただ、これは民間会社が制作し、それを支援するという一方で、あくまでも、基本的に主体は常に民間であろうと思う。
- 「日本博」について、津川座長からいただいた様々な御提案は、本当にできるのかなというものもあり、どうなのかと考えていた。ただ、1991年のジャパンフェスティバルが大成功であったということであるし、写真を見ても素晴らしいと思った。
- 先ほど、あれは「バブル期の夢」ではなかったかという話があったが、バブル期の年収が60兆円であり、あれが過去30年くらいの最高だったが、今は第2番目の約56兆円に達している。国費としては5億円だったということを引き、これなら考えられると思う。
- これだけのインパクトがあるものなので、費用対効果も踏まえ、かなり経済界に協力していただくことが前提だが、ぜひできることをしっかりとやっていきたいと思う。
- 日本の文化はすごい力を持っている。今までどちらかというと、外には語ってはこなかったが、これをうまく発信していくことによって、日本のすばらしさや美しさ等を伝えていきたいと思う。

## 5. 閉会

最後に、事務局より、次回日程等について以下のとおり説明があり、閉会となった。

- 今後の懇談会の進め方について、前回、委員の皆様方から「議論をもっと開かれたものにするべきではないか」「国民の意見を聞いたほうがよいのではないか」「懇談会の回数をふやすべきではないか」といった御意見を頂戴したところ。これを踏まえ、現在、事務局で対応を検討しているので、また詳細がまとまったら、具体的な開催日程とともに御連絡させていただきたい。
- 本日の議論の内容については、ホームページに議事要旨を掲載する。

(了)